2−2 東日本大震災直後を振り返り

取締役常務執行役員中国支社長　岩本 方克
当時）東北支社支社長

平成 23 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分、三陸沖を震源とするM9.0 の巨大地震が発生しました。宮城県北部で最大震度 7 を観測したのをはじめ、東北各地で震度 6 強など激震に見舞われ、さらに太平洋沿岸地域は地震直後に発生した大津波によって壊滅的な被害を受けました。

私は、この震災前年の 9 月に四国支社から東北支社に赴任して来ました。その時に、地震予知に詳しい方から「仙台は今後 25 年以内に地震が来る確率が高くなっているから気をつけろよ」と言われましたが、それがすぐに現実となってしまいました。

東日本大震災の直後から、電気や水道、ガス、通信、道路など様々なライフラインが止まり、食料品や燃料等の補給ができなくなり、その日の夜にはコンビニやスパーから物が無くなってしまいました。そんな状況下で、我社が本格的に復旧・復興支援をするためには、社員が迅速に動ける環境を作ることが必要となり、食料調達、ガソリンの確保、高速道路の無料通行などを優先する事としました。

まずは体力からと、発災から 2 日後に本店・本社から届いた支援物資を使い、社員や協力会社の関係者がいつでも食事が取れるよう、社屋内で炊き出しを始めました。炊き出しは社員の家族の方をアルバイトとして雇い、朝、昼、夜の 3 食分を作っていただきました。ただ、食事をするための食器が不足していたため、かき氷の容器と割り箸を各自に渡し、毎食後に自分で洗って繰り返し使用するようにしました。しかし、1 週間もすると支援物資が底を尽き始め、野菜や米を外部から購入しなければならなくなりました。そこで、社員の知人の農家から購入したり、市内で震災後に開いた露天商（闇市）から野菜を買ったりしましたが、この露天商が曲者で、日に日に値段が高くなり、一番高かった時には 30 ㎝程度の四角いダンボールにジャガイモや人参、玉ねぎが 5 個程度と大根と白菜が 1 個ずつ入って 7〜8 千円になっていました。この炊き出しは 3 週間ほど続きましたが、普段は貧しい食生活をしている独身者や単身者にとって、この栄養バランスのとれた食事の効果は抜群で、“震災太り”になる社員が多くなってしまいました。

社内炊き出し風景

次は、被災調査に行くためのガソリン確保と高速道路の優先通行です。震災から 3 日程して、建コン協東北支部長をしている地元コンサルへ訪問した時に、「震災復旧支援指定業者になれば高速道路の無料通行とガソリン優先給油を受けられるようだ」という話を聞きました。そこで、震災直後に国交省からの支援要請書がＦＡＸで来ていたことを思いだし、その要請書を手に警察署に行き、指定業者になれるのか聞いたところ了承されたので、支社の全車両の車検証を取って返し支援車両として認定してもらいました。おかげで、無料通行証明とともにサービスエリアにあるガソリンスタンドから給油できるようになり、事業推進活動や現地調査等において本格的に復旧支援できる状況となりました。

未曽有の震災の混乱の中で、今思えばなぜあれだけ動けたのか不思議になります。結局は、思いついたことから動いてみるしかなかったように思います。事業推進部員には支援パンフレットを持たせ「被災し仮事務所へ移転している役所を探して行け」と送り出し、事業部員には要請が来た業務はほとんど受け、不夜城のように昼夜を問わず支援しました。おかげで、被害の爪痕を残している所はあるものの、震災前の落ち着きを取り戻し、少しずつ新しい街づくりの形が見えてきました。

最後に、震災復興支援に関わった全ての方々に、厚く感謝いたします。